

「北京興亜学院から北京経済専門学校へ」

〔藤田〕 石田先生の略歴をご紹介します。大正八年のお生まれで、今年八十五歳でいらつしやいますが、なかなかお元気です。広島高等師範学校地理歴史科を卒業されたあと、京大の文学部で地理学を専攻されました。これから先が、石田先生の今日のお話と結びつくいろいろな経歴があったと思います。中国大陸の、保定陸軍予備士官学校（北支派遣甲一六四九部隊）でトレーニングされ、そのあと豊橋の愛大キャンパスの元の豊橋第一陸軍予備士官学校でもトレーニングをされたという話です。戦後になって岡山大学で地理学を教えられたあと、広島大学で長年、定年まで地理学を担当された先生であります。定年退職後、福山大学へお勤めになり、今もなお、元気に勤めておられます。

広島大学名誉教授
石田
寛

開い資料（1）演者プロフィール

石田 寛（いしだ ひろし）

履歴

大正8年3月1日 岡山県に生まれる
 昭和15年3月 広島高等師範学校文科第三部乙（地理歴史科）卒業
 昭和17年9月 京都帝国大学文学部史学科地理学専攻卒業
 昭和18年5月 北支派遣甲1649部隊（保定陸軍予備士官学校）
 昭和25年4月 岡山大学教育学部講師
 昭和37年2月 ニュージーランド国へ出張
 昭和37年3月 文学博士
 昭和41年4月 広島大学助教授（文学部）
 昭和41年12月 Ph. D. in Geography (Auckland)
 昭和55年4月2日 広島大学付属図書館長（昭和57年4月1日まで）
 昭和57年4月 広島大学定年退職
 昭和57年4月 福山大学教授（現在にいたる）
 昭和57年4月 広島大学名誉教授
 昭和63年11月 George Davidson Medal を American Geographical Society（アメリカ地理学会）より受賞
 平成4年4月 福山大学学長補佐（平成8年3月31日まで）
 平成13年3月 日本地理学会名譽会員

備考：研究業績をも含め詳細経歴は、福山大学人間文化学部ホームページ（<http://www.fuhc.fukuyama-u.ac.jp/human/hc/jpn/isidahistory.pdf>）を参照されたし。

お手元資料にもありますように、その間ニュージージーランド、インドをはじめ諸外国で調査研究のほか講義・文化交流に当たられました。先生のご専門は、元々は。

【石田】 放牧の歴史地理です。

【藤田】 その放牧も経済的な側面だけではなくて、歴史・社会学的な分析を踏まえて、家畜と人間との共存と言いますか、主に中国山地を始めとして非常にシャープに研究されました。そしてニュージージーランドへ行かれておそらくそれが發揮されて、さらにオークランド大学の P.D. をとられた。広島大学時代には日本の研究だけではなくて、インドの研究もされておられるし、その他世界中を駆け巡っておられる先生です。アメリカの地理学会から大きな賞をいただいたり、現在日本地理学会の名誉会員でいらつしやいます。

私も東亜同文書院のことに関しまして研究を始めてきたわけですけれども、正直申し上げまして最初の頃は石田先生が北京興亜学院・北京経専の研究をされているということとは、知らなかつたんです。ところが石田先生から今日このあと出るであろう中目覺というやつぱり地理学の先生で、興亜学院院长をしておられた方の伝記的著作物的研究、研究論文をいただき、大変びっくりいたしました。その後さらに着実にご研究が深まって、今日は別室で打ち合わせと言いか雑談をしたんですけれども、大変なご草稿をみんなで見せてもらって、驚嘆しました。

お聞きするところによりますと、両校の卒業生の方々から大変多くの情報をいただいたということで、今日は両校の卒業生の何人かが来てくださって、先ほど別室で話に花

が咲きました。ちなみに石田先生と特に親密な方が森下さんです（石田さんが保定予備士官学校九期、森下さんが十一期ということもあって）。森下さんは北京経専の第一期生で、最初石田先生は二人の名前でと申し出ておられましたが、森下さんが縁の下の協力は惜しまないから石田先生の単独発表としてやって下さいという経緯がございました。この研究を進められるに当たって、石田先生の周りにはいろんな方々のネットワークができておりまして、そのうちの一人、興亜学院二期生の王進益さんからの祝電が届いておりまして、あと手紙もあるんですが、時間の関係で祝電のほうを披露させていただきます。この方は国際的企業の会長さんで台湾歌壇代表として大変著名な方だとお聞きしております。

「石田寛先生、おめでとうございます。」として、五首詠んでいただいております。私が読んであまりうまくいかないと思いますが、ご紹介いたします。

中目の北京偉跡を極めゆく藤田佳久の高き心はも
高き心は中目師の功跡を莊嚴に刻む石田兄はも

名門校同学会の秘史百年を展しめし書 森下残す
(第四首、略す)……

悠々と北京史に残る学堂の中目覺に 明星輝く

私がお話をするよりは石田先生のお話のほうが興味深いと思いますので、石田先生のほうにパトントッチさせていただきます。ひとつよろしくお願いいたします。

【石田】 ただいまご紹介いただきました石田寛でございます。本日はすばらしい企画の第一回目に私如きの者をお招きいただきまして光栄でございます。主催者側に厚くお礼

を申し上げます。大役をお受けすることを決意しましたのは先師中目覺先生に対する畏敬の念と、前のほうに席を取っておられます北京興亜学院、北京経專の卒業生の方々の期待・声援によるものです。私が皆さんからいろいろ提供していただきました材料を基に、大胆に学校史を組み立てたのです。

さてどんなふうにしたら一番いいだろうか考えたのですが、私の話の全体をまず提示することにしました。そのため表示、図示、地図化、そしてコンテンツ（内容・目次）をご覧いただくことにしました。皆さんに今日お持ちいただいた資料の中に数字の入っているのがあるかと思いません。これが興亜学院から経專についてのいろいろな数字です。これは同窓生の数です（表一）。この数を見ていろいろ考えてみました。これを見ると北京経專の前に興亜学院がある。興亜学院の前にまた前史（一応語学校としましょう）があります。そういう長い長い歴史がありますが、その数字を今度は入学生・卒業生ということで考えてみますと、たとえば北京経專の場合は入学者はわずか四十五人。在籍数三三八人。卒業生は一九二名。この辺に課題を解く鍵がひそんでいるのではなからうかというように考えました。その解釈はまた後ほど申し上げます。

もう一つ奇妙なことは、同一の期の人が、時により、文脈によって二様に自分達を呼んでいることです。たとえば「興六だ」とも「経二」だとも云います。云うまでもなく前者は北京興亜学院六期生、後者は北京経済専門学校一期生という意味である。北京経專の第三期生というのは、こへも大勢お見えてございますが、その方々も「経三期生」

と言う場合と興亜学院の「八期生」と言うことがあり、どちらがいったい真実の姿なのか。用語で言えばアイデンティティ（帰属意識）の問題です。自分は興亜学院の八期生として入っているのだ、それが途中で経專の三期生になったんだという話を聞きますので、図一のような形・表現にしました。原図はお粗末だったので、図一のような形・センターでこんなに立派な図に仕上げてくださいました。それでいろいろ考えることができるようになりました。図一をとくとご覧下さい。興八として学校に入って、出る時は経三。

また別の学年でみるに、この経一というのはこれですが、入る時は興六で、ある人は経一として卒業するけれども、学徒出陣で早く入営した人はあとから経一になりました。入った時と出る時とで違うのです。徹頭徹尾、経專というのはただ一学年（経四期生）だけです。

語学校から北京興亜学院になる時も、そういう過渡期の問題がありました。台湾の王進益という人から祝電をもたらした話をしましたが、彼はこちら（語学校）に入ってから（興亜学院）への転入学です。この時は中目覺院長が一人一人に当たって、「お前は新しい学校へ移るか、それともそのまま卒業するか」という話をして、「私はもうここ（興亜学院）へは来なくてこちら（語学校）で出ていく」などと念を入れた。そういう人は厳密に言えば語学校卒でしょうが、一般には興一とされていきます。多くの人はこちらの興二になる。だが面白いことがあるんですね。その頃の北京はおおらかだったので、中国大学のほうへも入る。つまり二重登録をして、どちらも立派に卒業されたよ

表1 同学会語学校、北京興亜学院、北京経済専門学校同窓生：数字より視たる諸相

1. 語学校*

	会員数	※(1)X(2)X(3)を合せ、便宜上の呼称。それぞれ名称こそ異なれ、語学教育が中心であり、経営体は一貫して同学会である。
(1) 清語同学会 明38～大元	7	
(2) 大日本支那語同好会 大2～15	41	
(3) 北京同学会語学校		
昭元～10	125	
昭11～14	85	
小計	210	
計	258	

2. 興亜学院

期別		出身校所在地別人数				存命者数	
		内地	外地			1993	2004年 8月1日
			台	鮮	中国語圏		
興1	5	5				2	2
興2	64	41	1	3	19	17	15
興3	96	58		8	30	21	19
興4	106	76	4	10	16	30	22
興5	90	62		8	20	42	30
小計	361						

3. 北京経専

期別		出身校所在地別人数				存命者数	
		内地	外地			1993	2004年 8月1日
			台	鮮	中国語圏		
経1	124	83	1	9	31	74	35
経2	68	49	2		17	47	26
経3	101	57	1		43	43	37
経4	45	50**			45	12	12
経専小計	338						

計(興亜・経専) 699

総計 957

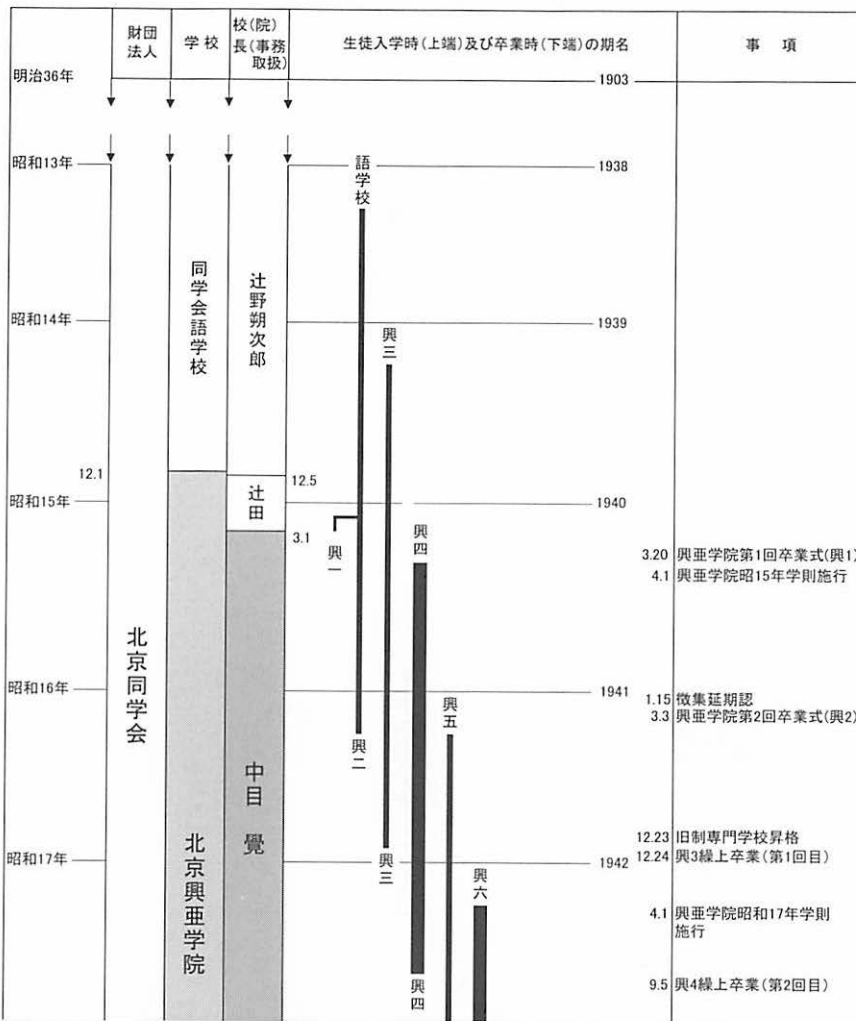
4. 語学校・北京興亜学院・北京経専の入学者・卒業者の数・比率の比較

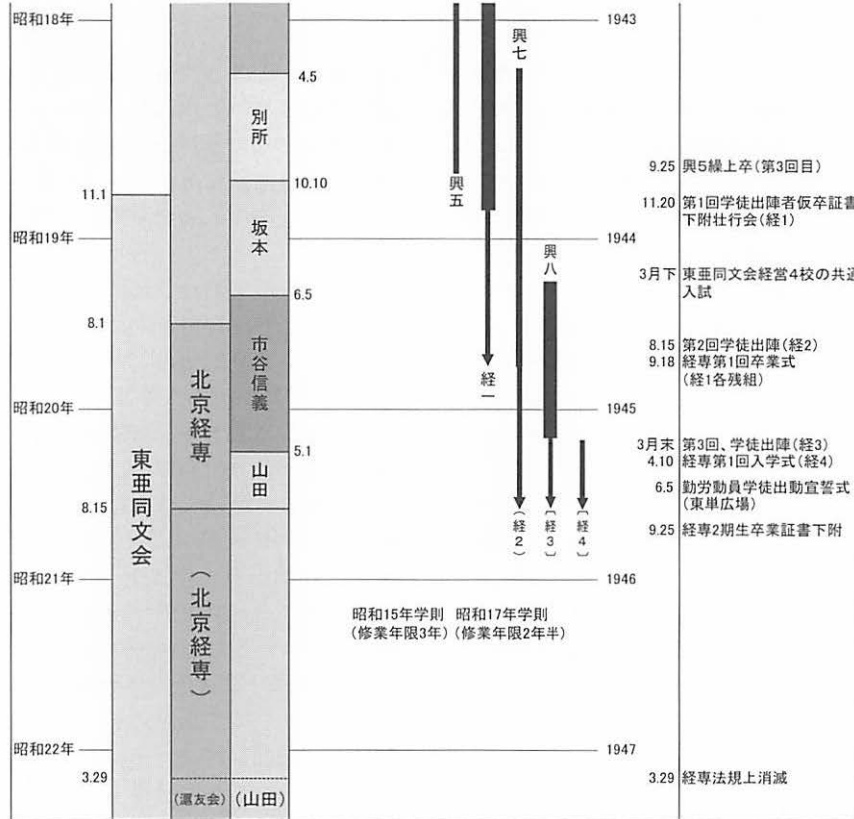
	入学者数 (比率)	卒業者数 (比率)
語学校	330人 (35%)	258人 (32%)
興亜学院	582人 (60%)	361人 (44%)
経専	45人 (5%)	192人 (24%)
計	957人 (100%)	811人 (100%)

備考：

1. 中楠誠、『創立90周年記念号』(1993年)に負うものの、森下博、河邑泰雄の緻密な調査によってその内訳が補われたものである。
2. 入学者・卒業生の数に就いては図1を参照。
3. **中国への渡航困難のため富山県呉羽で東亜同文会経営の4校入学者合同教育を受けた。

図1 北京興亜学院・北京経専の経営・管理運営および期ごとの学年進行概念図





備考1 那須清編『北京同学会の回想』の「沿革略」に負うところが多い

2 期ごとの学年進行表示の符号について

- (1) 棒の太さ3種は、太いものから100人以上、50人以上、49人以下
- (2) 同一の棒で下端が細っているのは、学徒出陣の反映である。
- (3) 棒の上端は入学時校名及び期、下端は卒業時のそれを示す。

下端の期名に付せられた記号について、()は戦後日本で卒業証書が下附されたもの

[]は戦後日本で在学証明書が下附されたもの (北京で早くも20年8月終戦直後受取った者もある)

3 年月日の表示について、元号(左欄)と西暦(学年進行欄の右側)を用い、その下方に月日を示した。

うな方が何人かおられます。これは有能な人が入っているんだから、あっちへ行き、こっちへ来て結構やっているのです。

図一を視て下さい。北京経専の前身は北京興亜学院で、これが北京経専。北京経専は日本の終戦と共になくなつたかの如く書かれているものが多いんですが、廃校ではなく、一応ここで閉校になっている、一時閉じているんだと私は強調したい。昭和二十二年三月二十九日に法規上学校はなくなるんです。それまでずっと学校は続いていて、その後東亜同文書院の同窓会である滬友会が面倒を見たのです。学校閉校後も卒業証書も出ております。このようにいるんなことを積み重ねて、学校の歴史を組み立てていく。公の記録では大東亜省が設置され、大東亜省の方針に従って「北京興亜学院は北京経専と改称す」と出ている。名前を変え。ただ名前を変えただけなのか。文面ではさらっとそう書かれているんですが、さてそこはどうなっているだろうか。北京興亜学院から北京経専へと名前だけ変わったのか、根底から変わってしまうのか、あるものは変わり、あるものは生き残つておるのかと、この題をもらつてそういうことを考えながら図一を作成した次第です。

表一、図一のほかにもう一つ前以つて皆さんにお持ちいただいたため作成したのが地図一です。

この地図は北京興亜学院・北京経専学生の日常生活の場たる北京市内図と彼等の出身校・在学中の調査旅行、終戦前後の学徒勤労動員、「学徒出陣」入営地などの関係要図であり、思いが詰まっている所です。これらの地は私の昭和十四年の修学旅行、十八年の軍隊生活の場所と重なつて

くる。この描図を通して私は興亜学院、経専の同窓生に近づける、血の通つたものを書かねばならぬという思いを切にする次第であります。

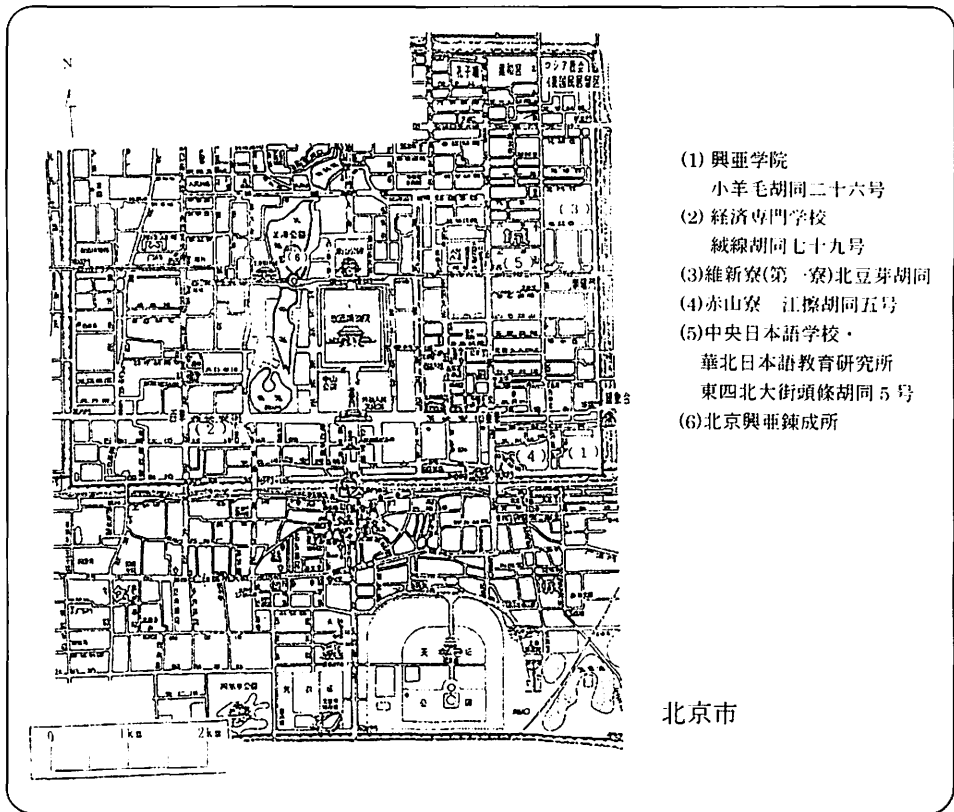
歴史の組立てに、最も大切なことは、資料博搜・情報収集、そして時代(期)区分であります。「北京興亜学院から北京経済専門学校」への時代(期)区分のために次の如く二つの指標、すなわち第一指標、財団法人(経営者)と、第二指標、学校によつて、

- (一) 北京同学会・北京興亜学院期……………第一章
 - (二) 東亜同文会・北京興亜学院期……………第二章
 - (三) 東亜同文会・北京経済専門学校期……………第三章
- と、三時期に分けます。そしてそれを第一章、第二章、第三章とご覧のようにします。第三指標たる院長(院長事務取扱)・校長の在任期間によつて章内の第一節、第二節とします。

このようにして困い資料(2)にみる如き目次を作成いたしました。

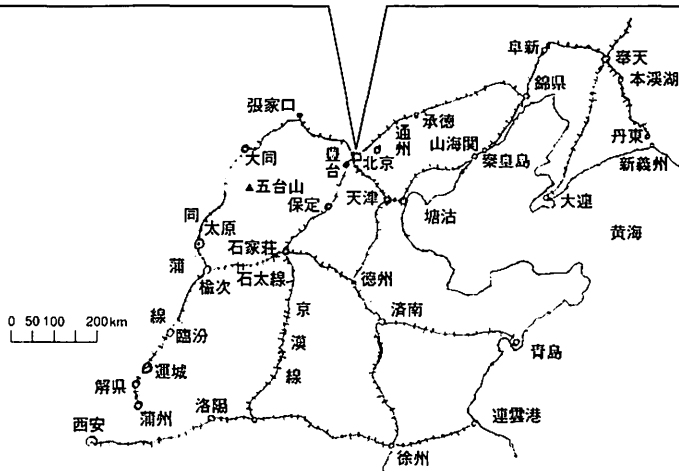
目次は図一、表一の内容を院長・校長の時ごとに「惹き付ける表現」(キャッチフレーズ)であらわし、さらに行事・出来事を「簡潔に簡条書き」(アイテミゼーション)したものである。この目次を瞥見しただけで山田昊校長事務取扱の時が長く、多くの簡条、さらに(付)までであると驚かれるでしょう。この章・節立て、簡条の採り上げ方に私なりの仮説(新しい解釈)が現れているのです。

以上をもつて序論部分を終えて、以下章ごとに院(校)長ごとに話をすすめていきましょう。



- (1) 興亜学院
小羊毛胡同二十六号
- (2) 経済専門学校
絨線胡同七十九号
- (3) 維新寮(第一寮)北豆芽胡同
- (4) 赤山寮 江擦胡同五号
- (5) 中央日本語学校・
華北日本語教育研究所
東四北大街頭條胡同5号
- (6) 北京興亜鍊成所

北京市



地図1 北京市・中国北部関係要図
(備考 森下博の協力を得た)

目次 (2) 目次

<p>序</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 演者とこの講演の係わり 2. プレゼンテーション <ol style="list-style-type: none"> (1) 表、図、地図 (2) コンテンツ (内容、目次) <p>第1章 北京同学会・北京興亜学院期</p> <p>第1節 高等専門学校(旧制)認可:ユニークな学期 —中目 院長の時—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時代背景と中目覺の北京行 2. ユニークなりべラルな高専(旧制)学期(興4・6) 3. 見直しに値する日本語教育実践・理論 4. 学生の通訳協力・調査研究旅行(興2) <p>第2節 新旧別の学期による生徒の併存 —別所孝太郎院長代理時—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 修業年限3ヵ年の興5と2年半の興6・7 —仮説的(hypothetical)学年・学期進行図 2. 18年度入試関連資料に観る17年学期の実施(興7) 3. 学院生活 一興7(経2)生を中心に— 4. 素晴らしい就職状況(興5) <p>第2章 東亜同文会・北京興亜学院期</p> <p>第1節 学校経営・運営・変革のための施策 —坂本竜起院長事務取扱時—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学徒出陣(第1回目, 興6=経1), 卒業仮証書 2. 東亜同文会による四校共通選抜: 経専3期 3. 北京興亜錬成所へ直行: 経3 4. 喝采を受けた院長事務取扱の入学式式辞, 自由度の高い全寮制 5. 通年4ヶ月勤勞動員(第2・3学年) 6. 北京興亜学院最終時における教職員 7. ストライキ(興8) 	<p>第3章 東亜同文会・北京經濟専門学校期</p> <p>第1節 多端な学校経営と状況悪化 —市谷信義校長時—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ストライキ事件の結着と校名改稱: 北京経専 2. 学園生活(経3) 3. 学徒出陣(第2回目, 経2) 4. 経専第1回卒業式 5. 校長の積極的運営, されど弱体化する教職員組織 <ol style="list-style-type: none"> (1) 学生の視る目(経3) (2) 特別科 6. 経4期生の入試 7. 入営者 壮行・送別行事(経3) 8. 北京経専最初にして最終の入学式(経4) 9. インフレ進行と発疹チフスの猖獗 <p>第2節 終戦直前・直後における学生・教師及び卒業生 —山田 眞校長事務取扱時—</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教職員と授業(経3・4) 2. 学徒勤勞動員: 経4期生・経3期生 3. 北京に帰ってきた教師と学生 4. 最前線で異国の月に涙した在校生・卒業生 5. 東亜同文会による北京経専開校計画とその頓挫 6. 卒業証書(経2期生)・ 在学証明書(経3・4期生) (付) 文部省による卒業生への教員資格認定 7. 経専第3・4期生の上級学校進学 (付) 愛知大学に対する経専在学生の親近感 8. 北京経専の法規上消滅と滯友会の配慮 <p>結び</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 誰か曾遊母校を想わざる <ol style="list-style-type: none"> 1. 同窓会刊行物 2. 同期会編纂物 3. 個人の回想刊行物、(付) 異色教授2人の著述 2. 中国語・バイリンガル(ニカ国語達者)を生かして
---	--

第一章は経営が北京同学会、学校は北京興亜学院の期。そこで第一節中目院長の時と、第二節別所孝太郎院長代理の時と、二つをここに挙げております。

中目^{あきら}院長の存在感… 企画的な旧制専門学校・ユニークな学則

図一で見ると中目先生の時が圧倒的に長い。今日は同文会・経専に重点を置きます。私は既に二、三論文を書いておりますし、時間もありませんのでなぜ中目さんが北京へ行つたかをまず見ましょう。大阪外語の初代校長として令名を馳せ、位階勲等も素晴らしいものをもらつていて、何を好んで北京まで行ったかということですが、それは時代が彼を強く需め、彼を招く力が大きかったです。

外地における日本人教育という観点からみると、それはもともと外務省の担当分野でした。支那事変後、東亜同文会にいろんなことをしてもらいたいという意見・プランが相当出た。そのうちの一つだけ実行に移された。それが、東亜同文書院の旧制大学昇格であった。

北京の興亜院華北連絡部ができて、いろいろ計画事業ができます。分かり易く言えば北京にあった北京大学は重慶のほうへ行つてしまい、北京には三年制の北京大学院ができる。そこへ日本からいろんな人を北京に送って、日本版の大学、向こうから言えば「北京偽大学」という悪口もあります。いろいろ言えるところへ日本から人材を送る。その一環で、同学会の語学校も三年制のしっかりした興亜学院になるということで、然るべき人物をということで中目先生に話がいく。

その時に、東大の名誉教授とか、どこその大学の学長さんとか、錚々たる面々が北京へ行きました。その場合の名誉教授というのは今日我々のとはちよつと違って、名誉教授という名で行くけれども、北京何々学院の実質的な学長の仕事をやるわけです。そういう中で中目先生は形も内容も完全な院長として行かれた。そうは言っても、どうして行つたのだろうかといういろいろ考えてみると、教え子朝比奈策太郎氏が人材の北京派遣人事を担当していたからであると云いたい。新村作なる古くからの友人であり、その上、広島高師での同僚が、「朝比奈策太郎氏が北京の国立師範大学へ行つてくれないかと自宅に頼みに来たので決意した」という風なことを自伝『八恩記』に書いているのを読んで、私はヒントをえた。二人とも同時に北京へ行っているし、二人が広島の高師の教授をしていた頃に、朝比奈策太郎は優等生で高文にパスして文部省へ、そして興亜院の誕生と共にそこへ移つていた人物でした。そこで私は中目先生も新村作（東大名誉教授、某私学の学長さん）同様、朝比奈策太郎氏に懇望されて行つたのだと思うようになりました。何も資料がないので朝比奈策太郎さんの子息で朝比奈新といて、国際的な弁護士にいろいろ話を聞いたけれども、積極的な話もなければ否定的な話もなく、まあそうだろうというぐらいのところまで終わっておりましたが、また後日談でそれを検証する資料が出てまいります（後述参照）。

まずは、提出すれば認可されるばかりになつていた旧制の高等商業レベルの学院認可申請書「暫定学則」（十五年学則）に、名前を中目覺と書き換えて提出することでありました。勿論認可されたものの、しばらくすると騒動が起



講演中の石田先生

こる。その騒動の訴えは三つ。一つはカリキュラムの改革がまだできていないということ。第二は徴集延期がまだ認可されていない。第三は旧制の専門学校認可の問題、以上の三つです。学生が入ってみて、入学案内に書いてあることと違うじゃないかと言う。そこで中目先生は文部省が認定するきちとした旧制高等商業になるのは五年はかかると言って、突撥ねる。「帰りたければ帰れ」と。それで相当数の人がやめた。

それに対する学生側の記録はまちまちです。このことに全然触れていない日記類もあれば、それを非常に大きく書いている人もありますが、私には五月病を黄塵の降る自然環境が増幅した面もあつたろうと思えます。

暫定的なものではなく、きちつとした高等商業にするための計画を立て準備をし、「専令」学則を提出する。それがまた大胆不敵で、よくもこんなものを書いたと思われる点が、二つある。一つは、暫定案では「国体精神を涵養し」——今の若い人はピンとこないでしょうが、——となっていたのを中目先生は「団体精神を涵養し」と書き換えた。国家至上主義でなく、リベラルなものにした。もう一つは、修業年限は二年半として、学年は夏学期と冬学期にする。入学して夏学期が過ぎたら、冬学期には二学年に進級する。そういう学則を作って、これで折衝をするのです。噂に聞くと勲章を付けたら勅任官で、偉いので、席次順をいうような廉ある時には役人は当惑するので中目先生はなるべく出席しないようにしていたのです。

しかし当時の日本の専門学校学則を読むと、いづれも三年と明記してある。まだまだ大学・高専の繰上げ卒業以

前のことです。繰上げ卒業第一回は昭和十六年の二月のことです。私はその二回ですからよく覚えています。そんな頃に中目先生は修業年限二年半と謳った学則を作った。

それが清水谷実治さん（興八〇経二）提供の皆さんに見てもらっている資料にきちんと書いてありますように、認められ実施されているんです。生徒募集の書類に明記されている。素晴らしい学則、正直云って先の論文を書く時「団体観念を涵養し」というのをみて、印刷間違いではなかるうかとさえ思っただけです。あとからもっといろいろご覧に入れますが、入試要項に「団体観念」とはつきり書いてある。人のやらないことをやる。そこに中目先生のユニークさ、大胆さがあります。

それから目次に示した学生の通訳供与というのは、この東亜同文書院は学生が非常に素晴らしい旅行をし、その記録が残って、藤田さんが中心で実に立派な研究成果が公開されている。その観点から見て北京興亜学院にも注目すべきものが二つある。一つはどちらも通訳供与。その一つは中目先生が行かれる前に満鉄調査部の調査に協力していた。王進益は一日十五円の日当をもらってびっくりしている。当時の十五円というのは大変なものです。一日ですよ。第二は北京にある高専、大学院が一体になり、昭和十四年には調査に行っている。ちなみに昭和十五年、中目先生の時には、治安が悪いため中止になる。

図一の右欄（事項）をご覧下さい。当時の日本人から見れば異様に思えるような、ユニークな画期的な学則（「専令」学則）が昭和十六年十二月二十三日に承認、旧制専門学校昇格が決定され、十七年四月一日学則は施行されるこ

とになる（昭和十七年学則）。この恩恵を早速受けたのは、云うまでもなく十七年九月（繰上げ）卒業の興四であった。私はその姿を十七年十月一日入隊（大学・高専卒のみの「幹候隊」）でたまたま私と同じ中隊、しかも同じ内務班に（興亜学院卒（興四）の男気にみた。興五の熊谷俊彦は、早速興亜学院が三井物産の指定校に昇格し、そこに任用されたと述懐する。これに見るように中目覚が院長として着任早々の入試で受け入れた学生（興四）が衿持をもって卒業して社会（軍隊俗語で「娑婆」）にで、あるいは軍隊に入っていく。それから数ヶ月後に行われる入試（同学会・興亜学院として最後）が中目院長の下で困い資料（3）に見るごとく行われていることが確認されます。

すなわち、修業年限二年半、第一学年夏学期を完了すれば冬学期から第二学年になるというユニークな制度が明記されており、それを明示して入試が行われたことが分ります。しかし、中目覚はこのような歴史的な入学式の二週間前に退任し、北京駅頭を発つ。ここで注意せねばならないことが第七条に記されています。二期制をとりながら夏学期の途中に夏季休暇があり、冬学期の直ん中に冬期休業がある。そのために一般生徒にはユニークな学期に対する認識がなかったのではなからうか。学務業務担当にさえ、その嫌いなしといえなかつたと私は見る。もっと厳密に云うならば、日常授業の展開においては、夏休・冬休をはさんで三期に分かれているため、第一学年の夏学期がすめば、第二学年に進学し、冬学期・夏学期と欧米で一般に行われているように学年が進行するとする中目校長の昭和十七年学則は、基底的なもの、潜在的なものになり、外形的には

(教務上は) 従来と変わっていないと認識されていた。しかし基底には学則第三条・七条として厳然と存在しており、ことに第三条(修業年限二年半)が、学生の身分保障に大きな底力となるのであります。

別所孝太郎院長事務取扱の時。 新旧別の学則による生徒の併存

中目院長のところでは話すことはまだまだありますけれどもこのくらいにして、第二節の別所孝太郎院長事務取扱の節に移りましょう。別所さんは文部省系です。この時は、ここを調べている時に、図らずも謎解きの様なことに出くわしました。同文会の記録の中に、興亜学院の月毎の学生数がずーっと書いてある(表二)。これを見て、どう読んだらいいんだろうかどんな意味だろうか、苦労したんです。四月から一年、二年、三年、現在人員と書いてあるのです。これを視詰めていてふと閃いたのは、「夏学期と冬学期があり、一年の夏学期が済むと二年生になる(十七年学則)。これで視たらどうなんだろうと思つて、ずーっと数字を入れてみました。そうしたら真ん中の昭和十八年の辺に小さい字ですがうまいこと夏学期、冬学期で全部丸く収まるではないですか。ははあ、これじゃ(図二)、これを整理する側は、そういう頭ではなしに、常識的な形で帳簿をこしらえたのであろうと私は考えます。

これは暗号解読をする時に、あるキーを入れるとパッと解けることがある。それと同じで、表二を解くための鍵は十七年学則だと直感してやってみた。果たせるかな図二にみるごとく、すべての数字が整然と収まるではないですか。

表2 北京興亜学院昭和18年度生徒現況

区分	在籍人員			現在人員		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年
学年級						
月別						
4月	93	130	95	82	107	80
5月	93	130	93	84	106	80
6月	90	130	92	83	106	79
7月	89	130	91	82	106	79
8月	89	130	91	82	106	78
9月	85	129	112	79	100	76
10月	85	22	61	79	0	100
11月	85	22	61	64	0	47
12月	70	26	61	62	0	46
1月	71	25	61	62	0	43
2月	73	25	61	57	0	42
3月	58	25	60	57	0	42

霞山会『東亜同文会史・昭和編』(平成15年)による

西暦		昭和16(1941)年												昭和17(1942)年												昭和18(1943)年												昭和19(1944)年												昭和20(1945)年												修業年限 短縮措置
		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	

学年度		昭和15年度	昭和16年度						昭和17年度						昭和18年度						昭和19年度						昭和20年度						
			夏学期			冬学期			夏学期			冬学期			夏学期			冬学期			夏学期			冬学期									
興5期	生徒数														80 80 79 79 78 76																		繰上げ卒業 (第3回目)
	学期		1			2			2			3			3			3			3												
学年																																	

興6期 (経1期)	生徒数							107 106 106 106 106 100 100						47 46 43 42 42												生徒出陣 (第1回目)					
	学期	1			2			2			3			3			3			3											
学年																															

興7期 (経2期)	生徒数							82 84 83 82 82 77 79						64 62 62 57 57												生徒出陣 (第2回目)					
	学期	1			2			2			3			3			3			3											
学年																															

興8期 (経3期)	生徒数																									生徒出陣 (第3回目)					
	学期	1			2			2			3			3			3			3											
学年																															

経4期	生徒数																									勤労働員 生徒出陣					
	学期	1			2			2			3			3			3			3											
学年																															

- 備考 1. 月別生徒数は霞山会『東亜同文会史・昭和編』(平成15年)による
これに該当集津月別生徒数は興8. 経4については得られない。
2. 修業年限2年半、第1学年は夏学期(4月1日より9月30日)で終わり、
翌10月の冬学期(3月31日まで)から第2学年とする学則は昭和17年入学(興6期)より経3期まで適用。

図2 仮説的 (hypothetical) 学年・学期進行図と興亜学院昭和18年度用月別・生徒数

私は驚喜し、「仮説的 (hypothetical) 学年・学期進行図と興亜学院昭和十八年度月別・生徒数」と名付けましょう (図二)。このような話をする、興味本位の数字遊びに過ぎないではないかと思われる向きもあろうかと思いますが、図二の如く生徒数が学年・学期進行にびったり収まってくるので、十七年学則は実施されていたのだなと考えるようになりました。

ともかくこういう形で別所孝太郎院長事務取扱の時にはいろいろ重要なことが見られます。第二は素晴らしい就職状況で、統計としてはつきり示され一人残らずしかるべき職場に就職しております。ちなみに、就職先学校一名とあるが、それは、本研究のためのキーパーソンの一人田中実・興亜学院助手任用のことです。

坂本竜起院長事務取扱… 学院経営運営・変革のための施策

第二章坂本竜起院長事務取扱の時はずぐれて過渡期であります。期間の大部分は北京同文会経営下の興亜学院であつたが、わずかの期日だけ東亜同文会が経営し、学校は興亜学院という過渡期の状況でした。坂本龍起(一八九四〜一九六九)はベルギー国日本大使館参事官から昭和十四年興亜院華北連絡部文化局長に任ぜられ、教育文化行政の責任者として間接的に北京興亜学院などに関わってきました。興亜院での最後の仕事が興亜学院長事務取扱でした。困い資料(2)で見るといろいろなできごとがあります。一番大きいのは第二項の、東亜同文会による四校共通選抜、これが非常に大きいですね。しかし個人個人について言え

ば、学徒出陣が生死に関わる大きな問題。この二つが非常に大きい。

学徒出陣は、ここにおられる森下さんがその第一回目の該当者であります。厳密に言えば三回繰上げ卒業があつて、その後今度は学業半ばにしての出陣であります。東京にある大学・高専の第一回目の学徒出陣式で十月二十一日東京明治神宮外苑で雨の中をいく写真が今もよく出ます。その中に坂本院長代理の息もいたのです。上海でも出陣式があつたが、北京では出陣式はなく、学内で、校長主催の式があつただけでした。森下博はその該当者です。この第六期生というのは、中目院長が作った新しい学則によつて入学し、第一回目の学徒出陣で出ていくという、そういう巡り会わせの学年です。高遠三郎は同文書院のほうから出ていった。

本日講演の演題「北京興亜学院から北京経済専門学校へ」を論ずるに当たつて最も重要な意味を持つのは、東亜同文会による四校共通選抜であります。その貴重な資料を困い資料(4)としてここに掲載いたします。

ご覧のように、東亜同文書院大学予科・同付属専門部・華北高等工業学校・北京興亜学院が、同じ問題で同じ所で試験をする。それぞれ第一、第二、第三志望校を書く。もう一つ注目すべきは(全国共通ですが)、中学校第四学年修了者が受験できることになつたことです。という風なことで行つたものの色々な事があつたようですね。

その辺のところはこちらの九大の名誉教授の上尾さんからちよつとお願いします。

【下尾】今おっしゃったように、四校共通の入学試験がございました。東亜同文会から同文合格という電報をいただいた。それで私は上海行きと決めておりましたら、その後北京へ行けという電報がまた来ましたので、そちらへ行つたということがありました。私の同期の者で、そういう者が他に一、二あつたようです。その頃の親父が千代田生命という会社に勤めておりまして、転勤になり平壤支店長として赴任することになったんです。それが私の北京興亜学院行きに連なりました。ちょうどいいやというところで、参りました。父親には本土決戦は逃れたいという思惑があり、もし死ぬ時が来れば一緒に死のうと考えていたようで、北京行きは好都合でもあつたのです。

それから今の清水谷さんとは私、お会いしたことはないんですが、私の先輩で、お訪ねしようと思つて、私その頃奈良に住んでおりまして、参りましたが留守でお会いできませんでした。清水谷さんは僕のような庶民から見れば少し距離を感じるのですけど京都の御公卿さんなんです。子爵の出なんです。

【石田】今清水谷さんは四国巡礼の旅に、ずーっと前から段取りができているから、それが先行するのでお許しくださいと言つて、ご丁寧なお断り状、欠席の連絡が来ていることをご披露申し上げておきます。私がここで自信をもつて話ができるようないろんな資料を下されそのおかげで、夏学期で第一学年はすんで、秋学期から第二学年が始まり、二年半の修業で卒業ということが検証された次第です。皆様のなかには、私も持つてるぞ、ということではいるんな資料の提供があることを、ひたすら願つてゐる次第でございます。

ます。

その次に北京興亜錬成所へ直行という問題、合格者を下関へ集めて、東亜同文会は田中実助教授に「宰領」させる。我々戦中派は「宰領」ということによつて全てが読めるわけです。上尾さんも田中実さんに宰領されていった一人です。その宰領官はその配下にいる人の生殺与奪の権を任されている。その代わり一〇〇%安全性をもつて届けなければいけない重責を負わされている。ところが潜水艦出沒警戒のため、何日か余分にかかつてようやく北京へ、しかもそれは夜であつた。田中さんは駅から帰され引渡した学生は錬成所へ。田中さんは私に「本当に、悔しくて悔しくて学生の事を思うと」述懐されました。学生は錬成所で二週間、非常に厳しい生活を強いられる。錬成所から帰つて、キリスト教の礼拝堂で簡単な入学式があつた。その時の院長事務取扱坂本竜起さんの非常に素晴らしい挨拶、自由主義的な訓示に大きな拍手がありました。これでこそ救われたと学生たちは思つたのです。あにはからんや、またいろいろなことがあつてストライキを起こすようになる。そのストライキのことを経三期の人はいろいろに詳しく報じております。

山田昊（ス）という「右寄り」の先生がいて、当時の在郷軍人会の力を背景に事を進めるといふやり方で、院長でも何でもないその次の人なのに。それに対して学生が反発する。遂に興八期の人はクラスで討議をして、「ストライキを」ということになつたようです。西田畊一（ス）という、東亜同文書院を出て居留民団の団長をしていた人が、「教官はあらゆる外的権力を排除して学生を穏やかに勉強さすべきなのに、

軍の勢力を背景にいろいろの圧力をかけることはいかかなものかと」と遠回しに書いております。

もう一つは、学生さんたちは経専に入ったのではなく興亜学院に入った。今では経三とよく言いますが、当時は興八という意識のほうが強かったようです。自分たちが受験したのは経専ではなく興亜学院だという思いが強かったと私には読めます。いろいろあつたようですが、その間の事はこちらの先生方は厳しい観察をしておられます。それでストライキに入る、というようなことになりました。院長事務取扱は昭和十九年六月五日付で外務省へ帰り、やがてペルー大使に任命される。

市谷信義校長…多端な学校経営と状況悪化

その次が同文会・経専期。学校の歴史からみると大きな変革です。校長は市谷信義の時期となる。新校長は着任早々襖ぎをし、ストライキ事件の決着を付けます。ストライキの首謀者は処分されていましたが、その処分を撤回する。やがて学校の名前は経専と変わり、校長も新しい人という形で出発をしていきます。全寮制で学園生活も、物価は高くなつていつておりましたけれども、当時の学生さんが、「一般状況に較べれば僕等は恵まれ過ぎていたのかも知れない。講義はまともに行われていたし、寮の食堂でもじい思いをするようなことは全然なかった」と回想しているように、充実した学生生活をしていました。

経専第一回の卒業式が挙行されます。卒業式は校長の立場から言えば、卒業生を世に送り出すという、最大の喜びであり光栄です。やがて、第一回の入学生を迎えることに

もなっていくのです。校長はマハトマ・ガンヂの研究者で、訳書の出版もしており（一九二六年）、健筆家で、福島高商の『信陵』によく寄稿していました。北京経専校長になつてからはかなり積極的な運営をしております。たとえば校歌を作るとか、いろんなことをやっています。また後から申しますが、その頃経四の入学試験を、同文会が前年通り、一括して行ないます。

困い資料（5）

昭和二十年度の入試では筆記試験が廃止されます。一七名もの合格者を得て幸先よきかみえたが、入学予定者は内地から四十五人、外地から五十名、合わせて九十五人に減る。そのうえ内地合格者の北京渡航は中止となり、五十名で経四はスタートということになりました。渡航中止

困い資料（5）

試験入学の各々学経文会同東年度20和昭

各々校入学試験		試験入学の各々学経文会同東年度20和昭	
本会経営各々校入学試験ハ本年新ニ決定シタル文記者ノ新方針ニ準シテ之ヲ行フコト、ナレガ新方針ハ従来実施シ来レル第一次試験即チ筆記試験ヲ廃止其他	戦時上ニ即応セル方法ヲ採用セルモノニシテ之ニヨリ募集スル実数ハ	大学予科	約二百名
専門部	約六十名	内訳	採録治金科 約四十名
北京工専	約二十名	電気科	四十名
北京経専	約百名	機械科	四十名
右ノ方針ノ下ニ募集セル生徒ノ内私費生生活ノ如シ			
予科	一四二名	北京工専	九八名
専門部	一〇四名	同経専	二二名
右ノ外例年ノ通り各府県ヨリ選抜セル府県公費生ハ		計	四六六名
予科	五二名	北京工専	三〇名
専門部	一一一名	同経専	五〇名
計	九八名		

即チ本会経営各々校ハ昭和二十年度ニ於テ派遣スベキ生徒数ハ公私費合セテ五六二名トナレリ

は北京だけでなく上海行も同様で、これらを富山県呉羽に東亜同文会が持っていた建物に集めて教育することになりました。

市谷信義校長は単身で北京へ来ていました。そこで春休みに家族を迎えに東京へ帰る。その時、三月十日の東京大空襲（都心部を深夜長時間B29による焼夷弾爆撃によって死者だけでも十万人を出し、阿鼻叫喚地獄）がある。その直後、市谷校長は長男を残し、家族を連れて北京帰任へと出立する。たまたま私はその頃東京で陸軍の情報関係の所へいましたので、東京の惨状や外電情報などが、改めて思い出されます。一、二の同僚も市谷校長と行を共にします。一行は下関で長く足止めをくって、やっと船に乗って北京へ着いたものの経三の入営壮行式・北京駅頭壮行には間に合わなかったんですが、新入生（経四）の入学式にはやっと間に合いました。

さて、此所で一寸時局・北京情勢を振り返って見ましょう。日本本土に比べて平穏で消費物資も豊富であった北京においても昭和十九年夏頃から戦局悪化、インフレ激化に伴ない、学生は物価高騰・食料事情悪化に直面します。それはまだましな方で二十年三月には、慌しく徴兵検査・現地入営へと事態は急転していったのです。

経三の入営について河邑秦雄は昭和二十年三月三十一日、我が北京興亜学院同期生の大半が、入営のため学院より去って行った。北京駅で見送る。祝入営の旗や幟をたてて、学院より北京駅まで別れを惜んだ。翌四月一日、教室はガラスンとして淋しい限り、残留同期生はなんと、僅か約二十名となつてしまつたと記している。また棚橋健一は、防諜

のため、日の丸を持っていくとか、賑やかな見送りはしないことになつていたんだけど、四月一日、経三期の人が出征していく時には、北京駅で盛大なるストームを行つて見送つたと書いています。さらに天津駅での壮行についても棚橋さん、少しお話しただけですか。



棚橋健一氏

【棚橋】 同じ経三ですが、弱年のため残された二十名余の一人、棚橋です。天津でも小規模ながら級友入営の壮行をいたしました。北京で乗車入営級友約七十名のうち二人は私同様天津に実家がありました。自由に行動ができず、天津の親元との連絡もうまくいかない。そこで私は北京での壮行ではなく、天津に帰って、この二人を初め他の学校からの学徒兵の家族、知友数十名で壮行することを企画しました。あらかじめ入手していた情報通り三月三十一日午後二時頃、火車はカランカラン鐘を鳴らして天津東駅に入構してくる。かねて打合せた通り、車窓一杯に空け、日

の丸を揚げ体を乗出し、手を振っている。声を限りに励まし、武運長久を念じ、手を握り合っているうちに、「火車」はゆっくり動き出す。万歳万歳の喚声のまだ続いているうちに火車の姿は見えなくなりました。四月四日広岡君と一緒に北京帰寮、残されたクラスメートは僅か二十名ばかり、寂漠の感に打ちひしがれながら、五、六名ずつの部屋割りをしました。

〔石田〕 ありがとうございます。お話を聞いているうちに、昭和十八年春、山海関、天津、北京各駅で停車し、そこから京漢線で南下していった時のことが改めて想い出されました。手を挙げて下さっている山住隆生さんどうぞ。



山住隆生氏

〔山住〕 私も同じく経専三期です。今お話がありましたら、或いはそれより一年前の入学の時のことについて申し上げますと、同文会の入学試験を受験した際、私の父が青島の日本商社に勤務しておりましたので、面接試験官が青

島に実家があるのなら、上海まで行かなくても、北京の方がずっと近いから北京の学校にせよということで、昭和十九年四月に北京興亜学院に入学しました。

なぜ、私が上海にこだわった様な発言をしたかと言うと、後述する様に、北京の学校に入学した一年後に学業半ばにして入隊し、それから半年後に終戦になり、北朝鮮からソ連シベリヤへ渡って、二年の過酷な重労働に従事し、人生に悔いの残る狂いを生じた。若し上海の学校に入学していたら、同じ時期に入隊していたとしても、終戦時は中国内に居り、終戦後にいち早く家族と一緒に日本へ帰国できたという無念さが、いまだに頭の隅にあつたからであろうと思います。

我々は昭和二十年の三月下旬、丁度一年生が終わった時の早朝六時頃、我々の寮にドヤドヤと人が入って来ました。皆起こされてよく見ると、軍医と衛生兵が六、七人「今から兵隊検査をする」。大正十五年九月三十日以前に生まれた者は一列に並んで検査を受け、十月一日以降生まれの者は対象外ということで外に出されました。私は九月十九日生まれですので、十二日のことで検査を受け、数日後の三月末に北支の部隊に入隊しました。

当時の満州には、関東軍という日本の精鋭部隊が駐屯していました。その殆どが南方の戦線に移動し、北朝鮮から満州にかけては兵隊が足らず、我々はその補充として、一年線上の入隊ということになったのです。

北支入隊後三カ月の初年兵教育を受け、七月末に北朝鮮へ移動し、そこで八月十五日の終戦となり間もなくソ連軍が入ってきました。咸興の興南港にソ連の大型貨物船が入

港し、我々は、臨港倉庫内に山積みされた米俵を二週間ほどかけて、貨物船の喫水線の赤色が見えなくなるまで甲板の上に積み、その上に兵隊はぎっしり乗せられました。日没後三隻の貨物船は出航し、船尾にはソ連の旗が、船橋にはソ連兵が自動小銃を構えて警備していました。

船は低速度で二日経っても、三日経っても左側に鳥影が見え、日本海を横断すれば一日以上は、鳥が見えない日がある筈だかと思っていました。船は四日目の夜、港らしき沖に停船しまして、遠くにかすかに明かりが見えました。甲板に乗せられていた兵隊達は、口ごとに新潟港だ、いや舞鶴だ、小樽港だと喜んでいましたが、夜が明けて鳥影を見ると、山の上には高射砲が林立し、遠くの港町は日本の景色ではなく、ウラジボストークだったのです。そこで米俵を全部下ろし、これが重労働にかりたてられる日本軍の食料になるのです。炭鉱や雪深い山での伐採では三、四割近くの者が死んだところもあるという、その中には学徒兵もいたという時代でした。

【石田】 どうもありがとうございました。経三の七十数名が済南へ向けて出征した後、校長は東京から帰ってくる。やがて四十五名を受け入れる入学式をします。その時は、数が少ないから、校長さんと学生さんはお互いに自己紹介までしたそうです。校長さんは青春の三年間を過ごした第三高等学校の寮歌「都ぞ弥生の」を歌ったことが強く印象に残っていると四期の人は書いております。

市谷校長には歌心がありまして、「鐘が鳴る京の山に……」という寮歌も作っておられます。さらに自分でこの北京経專の校歌を作り、それを東京音楽学校の作曲科に依頼し、

できあがった譜面を持って、北京へ帰る途中で船が止められ、いろいろなことがあって、それが元で命を失うことになるのです。その校歌の原本はもう存在しませんが、長男の昭君が当時自分の愛唱歌の一つとして書き取っていたものが残っており、一部欠落していますが、大体の歌詞を知ることが出来ます。次男の市谷坦君はこの歌は倉皇の間だから、あまり歌われていないだろうと書いておりましたが、そうではなく、「この歌を歌っている」と、黒田涵兵衛は『燕京』の中に次のように書いております。

黒田涵兵衛は二年生なんです。校庭で故市谷校長作詞の校歌「崑崙の高嶺を凌ぎ」を新入の一年生が歌っているのを自分は聞いていた、と言っていますので、市谷校長はいい歌を残されたと思います。

市谷校長は、長女の方が音楽家で、学生さんに音楽を指導すると言いますか、ちよつとした潤いの一時もあつたんですけれども、やがて、発疹チブスで亡くなつてしまわれます。その辺のところは棚橋健一が自分史に見事に描写しています。令息坦君は結局発病の原因は北京の衛生環境の悪さではなく、連絡船の悪い衛生状態が非常に長引いて、そこで感染したと考えられると言っております。日本流に校長先生の柩を教え子達がかついで、北京の町とのお別れ、お葬式をしました。

山田昊^{わかし}校長事務取扱… 終戦直前直後における学生・教師及び卒業生

山田昊教授が校長事務取扱に任命される。授業継続困難と停止、全生徒出動という最も厳しい事態に対処していき

ます。

新入生四十五人は二組に分けられそれぞれに級長・副級長が指名された。授業はわずか二カ月足らずでしたがきちんと行われた。最も印象に残るのは山田昊院長の原子爆弾の話であったと、塚田忠博は回想する。外国語では一年生は専ら中国語であったが、上級生はロシア語・蒙古語も学んでいたと同氏は語る。

六月五日勤労動員学徒宣誓式があり、在北京日本人学徒千五百人を代表して、経二の森雅雄が宣誓する。経四期四十五名は配属将校松倉儀助大佐に引率されて河北省豊台の陸軍貨物廠へ入る。三箇班に分れ、内務班生活をしながら訓練を受け、やがて勤務につく。塚田忠博は「私の関知する限り私的制裁はなかった」というが、斉藤正男はかなり陰湿ないじめがあったようだという。しかし小夜食として週二回羊羹が配られたのはせめてもの救いといってよい。

経三期のうちで年が若くて、学徒出陣しなかった者二十二人。この人たちは北京城内の甲第八百部隊の小沢隊へ入る。中国語が非常によくできて、そのために大役を仰せ付けられた上野昭夫らは、いろいろなことをしたようです。ね。上野昭夫の『残照』という本の中に載っておりますが、終戦間近になりますと中国人にはかなりなことが分かっていったようで無理難題を申し込んで、食糧をくれとかいろんなことがあった。本職の正式な通訳が中に入るんですが、その協役をさせられる。遂に食糧を放出する時、群がる群衆と陸軍糧秣廠の中間に立って、二人で状況報告をして仲介をしたというまことにドラマティックなことがあったようです。

分散的にあつちこつちに行つた経二期生の残留組（約三十人）は分散的にしかも流動的に配置され自由度が高かつたようです。このような話をしますと、東京の私たちの部署に配属されてきた学徒出陣兵（見習士官、候補生）、勤労動員学徒（東京文理大、東京女子大、日本女子大）受入れ・組織化しての、きびしい研究の日々がふと想い出されます。北京で特に注目されるのは、情報関係のところへ行つて仕事をしていた学生のことです。日高機関の話は皆さん聞いておられますかしら。ではちょっと熊谷さんから。【熊谷】昭和二十一年五月、北京西郊の日僑集中營で帰国を待っていた時、兄（ハルピン学院出身でロシア語ができ当時既に中国側に留用されることが決まっていた）から、引揚船に乗れるよう手配をした。この船が一般邦人最後の引揚船になるかも知れない。日高機関の人達と一緒だ、その引揚船隊長棟田博の通訳をやつてもらいたいと頼まれたから引受けてくれという連絡を受けた。乗船時、日高機関の人達はみな偽名を使つており、棟田博は宗方小四郎という偽名を使つていた。

【石田】そうでしたか。今のお話で、私のかすかな断片的な記憶が繋がってきました。棟田博氏が作家として戦後大きく世に出てきた時、私は「彼は津山出身だ、岡山の連隊か、北京の兵站で会つているようだが」と漠然とした記憶が頭をもたげたものの、そのままになっていたのが、熊谷さんのお話で「私は北京兵站で会い、西単に宿泊手配を受けた（昭和十八年初冬）のだ」と、只今断片的なことが全部繋がってきました。そして私の想いは、北京兵站から日高機関へと連なつていきます。

【熊谷】 乗船時に日高夫人ほか二、三名が中国側に乗船を拒否されたそうです。一般の帰国者は船底にごちゃごちゃ詰め込まれたが、通訳の私や医師達指揮班の者は上の船室で大助かりでした。どの人が日高機関の人か分かりませんでした。親しくなった幹部らしい人は腹のすわった人に見えました。棟田氏は別れ際に「僕は太抵作家の長谷川伸先生？のところか、銀座のルパンというバーに居ます」といわれたが、引揚後一度も会ったことはありません。

【石田】 そうでしたか。本当に皆さんご苦労をされました。さて終戦の八月十五日前後のことは、聞いていただきたいことも数々あるんですが、ここで私は経専二期の清水谷実治からの話を披露しましょう。日本軍の戦況芳ばしからず、保定陸軍予備士官学校（甲一六四九部隊）候補生（第十三期生）は八月の卒業を前にして急遽作戦命令が発令され、ロシア軍、八路軍の進行を阻止する目的をもって出動する。

清水谷候補生の所属する歩兵隊（隊長は現役中佐）は長城線の東北（八達嶺―延慶）に分散布陣する。八月十五日国府軍総統蒋介石より予備士官学校長（甲一六四九部隊長）伊藤少將に「国府軍を急遽派遣するから共産八路軍に投服するな」の指令が届く。やがて国府軍到着、円滑な武装解除、天津の物資部基地に移動。候補生捕虜については格別待遇をし、さらに日本再建のためにと優先的日本帰国となる。（二十年十一月中旬―十二月上旬）、塘沽港で米軍上陸用舟艇に分散乗船。佐世保に上陸、運がよかったと感じたと、これが清水谷実治が私に語った所です。

北京から引揚にまで言及しましたが、北京に帰ってきた教師、学生、学校に話を戻しましょう。終戦とともに学校

としての授業はできず、閉校するが、決して廃校になったわけではない。「売東西（物売り）」しながらも授業をしてくれと集まってきた学生もいたが、学校としては出来ないの一辺倒な返事でした。このような情勢下にあつて、「一対一」で一年近く授業を施した人物は北京の超一流学者、同学会の表看板の高玉珊老師、受けた学生は上野昭夫（経三）。高先生は国籍やすべてを超えて、諄々と説き、最後に山海経（せんがいきょう）について語る。老師は蘊蓄を傾け若い上野昭夫を記紀（きぎ）の記述、古代東アジア世界に透引、啓蒙の日々であつたようです。

一日五時間の講義が昭和二十一年四月二十四日まで続く、上野昭夫はこの日こそ興亜学院・北京経専の真の閉鎖日であつたと記しています。上野昭夫はそれを『燕都の残照』天の巻、地の巻の二冊の本にして出している。そして三冊目の人の巻も脱稿にしておりながら、出版間際に命が絶えて出版することができず、非常に辛い思いをされました。日本でも歴史地理の分野では山海経の研究をもっとやらなければいけないと思われてなりません。上野昭夫の著書こそ「少人数教育」、「切磋琢磨」の結晶・典例といえます。

さて修業年限の問題と、卒業証明書の問題、これだけはどうしても再度言わなければいけないのですが、私はあの図一と二を作成しながらいろいろ考え、れました。経専二期生と経専四期生には終戦直後九月二十五日付卒業証書、在学証明書が、そして、経三には翌二十一年八月二十日付在学証明書が出されている。事情は錯雑しており、不思議に思えることも多い。終戦直後の通信状況下において、

校長事務取扱山田昊及び東京の東亜同文会の臨機応変の対処に驚嘆します。東亜同文書院呉羽校へ入学準備をすすめていた経二の橋本功は二十年九月十三日に「東亜同文書院専門部と同様な取扱を為す事相成候」と学長代理斎藤守より手紙を貰い、転入学手続きをとるべく運んでいたところ、経専二期生卒業証書が交付されるとの朗報を得る。かくて橋本功は受験の必要がなくなり、終戦直後の荒海に出ていきました。

他方、北京の様子をみるに、上野昭夫「わが記憶の断片抄」『燕京、経三 五十周年記念誌』（平成七年四月）は「昭和二十年九月二十五日、小羊毛校舎で北京経済専門学校第二期卒業式、学生不在のため、卒業証書は現地では発行されなかった。三期生の修了証明書と同時に、昭和二十一年八月二十日になって、東京の東亜同文会から山田昊の名で東京で発行」と注目すべき情報を伝えていきます。さて橋本功の東京での経二卒業証書下附二十年九月二十五日と、上野昭夫の北京情報（経二の卒業式九月二十五日）、その月日は偶然の一致とは考えられない。東亜同文会が確保していた通信機能に改めて思いを致す次第であります。

ところで経二の昭和二十年八月二十五日の卒業式（経専第二回）のことは、図一に明記しているところです。この図一をよく視ていただきたい。経二の棒の長さを測ってみて下さい。三年には程遠いとはいえ、興亜学院の学則「二年半」で視るとわずか一カ月位足りないだけです。なお図二を視て下さい。経二の場合は第三学年夏学期の所定日数までごく僅かであることが誰の眼にも明らかでしょう。時勢に敏な山田昊院長事務取扱は、学則を読み込んで経二の

卒業を決断し、終戦から十日後、たとえ証書受理者は北京には一名もいなくとも卒業式典を挙行、天晴と云いたい。

問題は、第三期生の多くは実際は一年しか授業を受けなかった。あとは軍隊にやられた国家責任を感じて、恩賞として二年修了の証明書がもらえたのではなからうかという解釈もあるようですが、私は決してそうではないと考えています。修業年限二年半。第一学年は夏学期で終り、冬学期から第二学年になり、その次の夏学期を終了すれば、第三学年に進学、そこで冬学期・夏学期を終えると卒業というのが興八期生入学時の学則です。学生の勉学上は三学期であることは開いた資料（3）及びその説明の所で既言及したところであります。まず図一を視て下さい。棒の太さの点で経三は興四、経一と共に目立つ、経一よりも太いものが忽然として細くなっています。慌しく生徒出陣となったためである。入学時の学則に謳われている身分保障は卒業まで生きており、図二で視られるような過程で学生は見護られているのです。図二を改めて視て下さい。経三生徒出陣者は第二学年の半分（冬学期）を終了したところで戦地へ出発、弱年残留組は第二学年終り間近くして終戦・閉校となっています。以上が学則に照しての私の見方であります。経三に第二学年修了の証明書を発行しているのは、特別な配慮・恩義からではなく、学則の深い読み込みに基づくものと、関係者の積極的思考・力量・決断を私は評価したいのです。

【高遠】私は東亜同文書院の四十一期生です。昭和十八年の学徒出陣（第一回）で、今日来ておられる森下さんと一緒に保定陸軍予備士官学校に行つて、苦楽生死を共にした

仲でございます。彼からよく興亜学院の話は聞いております。今日石田先生のご研究の成果を伺いまして、私の知らないことをいろいろと教えていただいで一層分かった気がします。ひとつ質問でございます。森下さんから聞いたのはいつも興亜学院の話なんです。北京経專の話も聞いたことがあるかも知れないという程度です。経営母体が北京同学会から東亜同文会に移った、これは戦争末期ですね。それによって、変わったのか、かなり本質的に変わったのか。

卒業生は、たとえば興亜学院の卒業生と、経專の卒業生（あるいは在学生）とで、意識の差が相当あったのかどうか。同窓会などで卒業生が集まる時は、共同でやる場合のほうが多いのか分けてやるほうが多いのか、意識の差があるのか。経営者が変わったら根本的にそんなに変わるものなのか、あるいは変わってはいないのか、ということ。今日お話を伺いながらちよつと感じたわけですが、今日は大勢の方が来ていらつしやるので、どうなのかということ。をひとつお聞きしたいなと思いました。

【石田】 いい質問で私がこの講演をお受けした時にセンター運営委員長藤田佳久先生から電話で研究のキーワードは何かと尋ねられました。すぐには答えなかつたんですが、そのキーワードのひとつに「帰属意識」を入れることにしました。これは近頃英語で「アイデンティティ」と言うもので、彼等は外形的には経專になっているが、本心も経專になっているのか、それとも興亜学院のままなのかという根本に触れる問題です。目次の第一頁第二章第一節に、ストライキ、興八として行っているのは、彼等は興八として行動していると、私は解釈して経三でなく敢えて興八と表現し

たのです。その辺のところは、上尾さんが非常にデリケートなところを研ぎ澄まされたセンスで書いておられますので、ひとつことおっしゃってください。

【上尾】 私共は北京興亜学院に入ったという意識があるんです。私の場合は先ほど申しましたように電報が来て北京に参りました。僕はいろいろなものに経歴を書く必要がある時には、北京興亜学院に入学したと書いています。それは学院に入つてみて感じたのですが、中国人の先生が多く居られ、今日の大学なら「中国語学部」とでも言うべき雰囲気があつたのです。その頃、「名称が変わるのだが経済専門学校となる予定だ」という話が、確か山田先生からあつたのです。

学生たちは「外事専門学校にはならないんですか」と言つたのですが、「外事」という言葉には、中国ではあまりよくないニュアンスもあるのでね、という話でした。学生達が外事にこだわつたのは中国語の本場の学校で学んでいるのだ、そこには清朝貢士の高玉珊先生が居られるという誇りがあつたからです。高先生が注音符号（注音字母）の作成者の一人だつたということ、皆知つていて、中国語の純正な発音は高先生がその本源なのだ。僕達は思つていたのです。そして、自分達はその直弟子なのだ、という誇りがありました。その思いは、後年中国語・中国文学を学ぶようになって非常に強くなり、経歴には必ず北京興亜学院で学んだ、と書いているのです。それから高遠さんのご質問ですが、卒業生が集まる時は一緒に集まつております。先輩後輩という意識です。

敗戦になつてシベリアから帰つてきまして、愛大の予科

(その当時は予料がございました)に入りました。私は文学をやるうとしておりましたが、愛大にはその当時文学部がございませんで、作るという気配もなかった。それで私は九州が郷里ですので、九州大学のほうに、予料が終わって移りました。

それから、ちょっと余計な話になりますが鈴木擇郎先生からお手紙をいただきました、「うちへ来い」ということで擇郎先生のお宅に泊めていただいた。「今度愛大にお前を採用したいと思うんだが」というお話でした。それで決めようと思っておりましたが、その話は途中で流れたんでしょうね。鈴木先生から「いや、申しわけない」と。それから私は九州大学のほうは研究生で、その大学でしばらく教えておりましたが、ちょうど私が九州大学で採用されて、少し経ったころ、細迫先生が学長会議か何かで福岡にお見えになったんです。そして細迫先生から電話がありました。「ホテルに来い」というので参りましたら「お前愛大に來ないか」というお話でした。私は九大に入ったばかりだったのでそう申しましたら、「そうか、じゃあ十年経って来い」とおっしゃっていただいて、その晩、愉快そうに何度も「愛知大学の名を高めよ」と歌われました。学生歌の方は「……名をたたえよ」なのですが、先生は「高めよ」と歌われるのです。ホテルの窓の下には、中洲の夜景が広がっていて、美しい晩でした。その頃は学生運動猖獗の頃でした。それから細迫先生は学校をお辞めになったと思うんです。

その後私は向こうに根が生えてしまつて、愛大に来ることとはできなかつたんですが、今日ずつと歩いて来ますと様

子がすっかり変わつておりました。ただ昔の大きな松の木が、あれから数十年経つてますます大きく立派になつていて、非常に懐かしい思いで松の木のところを歩いて参りました。

それからもう一つ余計なことと申しますか、まあ微妙なところですが、愛知大学の学生歌というのがありまして、あれは私の弟の上尾歌輔という者が作詞者になつております。その時私はちょうど九大の卒業論文を書いておりまして、弟が愛大の学生で入つておりました。その時に学生歌を募集しているということを知らせて来ました。弟が申しますには、これは在学生しか応募資格はないんだと。私は非常にそれを書きたいという気持ちになつて、書いたんです。やつぱり予料の時代を過ごしていたということが忘れられないのです。私の名前では通りませんから弟が「じゃあ俺の名前で出せ」と。それで愛大の学生歌は私の弟の名前になつております。そういう妙ないきさつがございます。その弟が最近死んでしまいました。まだ死んで一年も経つておりませんが。そういうことで私と愛大との因縁と言いますか、愛大のあの歌を聞きますと、やはり懐かしいと言いか青年時代の純粋な気持ちになるのです。

【石田】 どうもありがとうございます。特に経専、興亜学院の皆さん、本当にありがとうございます。

〈付言〉アイデンティティ (identity) の問題は「北京興亜学院から北京経済専門学校へ」を考察するためのキーワードのうちで最も重要なもので、序論部分で採り上げたところであった。高遠三郎から本質に迫るコメントに上尾龍介の示唆に富んだ応答がありました。しかし、私から答える時間的余裕はもう残されていなかった。さらなる発展のために、帰属意識に就いて次の如くシソーラス (同類語・対立語・関連語) を整えてみました。

Identity 帰属意識

RT. * dual 〱 二重帰属

See dualism 二元主義

mono 〱 単一帰属

See monism 単元主義

institutional 〱 制度的帰属

sentimental 〱 心情的帰属

dual registration 〱 二重登録

single registration 単一登録

* scholastic mantle or national demand 学統か国家的要

請か

* youth's purism vs an adult's idea 青年の純粹対大人の考

そして、英語でこのテーマで何かを書く場合には、※、※※印を付した三つを key words としたい。ここに挙げた英語語の日本語対応語 (語訳) は、中国人には通じるであろうか、中国の簡体字ではどのようなようになるであろうかと思つた次第である。有難いことに早速上尾龍介が私の日本語用語を次のように簡体字で示してくれた。

identity 帰属意識

dual identity 二重帰属

See dualism 二元主義

mono identity 単一帰属

See monism 単元主義

institutional identity 制度的帰属

sentimental identity 心情的帰属

dual registration 二重登録

single registration 単一登録

scholastic mantle or national demand

学統或国家的要求

youth's purism vs an adult's idea

青年的单纯与成人の思惟

私の講演題「北京興亜学院から北京経済専門学校へ」の簡体字と拼音ローマ字での表語について、北京からの呉榮傑客員教員から次の如き教示を得た。

cóng Běi jīng xīng yà xué yuán dào Běi jīng jīng jì

从 北京 兴 亚 学院 到 北京 经济

zhuān mén xué xiào

专 门 学 校

もつとも経済専門学校というのは現在中国には該当するものがないので、経済专业 (專業) 学校となるのが、歴史的存在であるからと、上記の如くしたものである。

dual identity (二重帰属) の中国簡体字での表記 “二重帰属” も得られた。それに対応する中国の成句もあるのではなからうかとふと望蜀する次第である。よりよき表現を求め、より広く国際的に通ずる表題をと、講演題を次の如く考える。直訳すれば、‘The Transformation from Beijing Ko-a College to Beijing Economic college びあろが’が、内容にまで突込んで ‘A History of the Namechange from Beijing Ko-a College to Beijing Economic College なる英語表現を提示した’。

漢字文化圏には、巨大な人口と優れた文化の蓄積がある。その漢字も「繁体字」が使用されている台湾、香港から、漢字と最も早く決別してしまつた越南までの間に、常用漢字（日本）、簡体字（中国）などがある。私の研究・教育遍歴のなかで、ベトナムからの留学生が直接師弟関係は無いのに試験の結果を気にして私の研究室を訪ねてきて（オーランド大学、一九六二年）の雑談が越南の漢字のことであつたことがふと思ひ出される。

さて、私は中国の簡体字にも次第に親しみを覚え、初めほど手ごわく感じなくなっている。

漢字文化圏に関心をいだき誇りを持つていただけの一歴史地理学徒として、圈内諸国間のお互いの意志疎通、相互理解の深化についてかくのごとく積極的な思い入れがある。況や注音符号作成者の一人高玉珊老師の下で北京官話の少人数教育を受け、北京の胡同の息遣いをかみしめている北京同学会の面々、語学校、興亜学院、経専同窓生においておやであるうと、自愛のうえで活躍の継続を祈念する次第である。

二〇〇五年二月九日

注

注1「北京興亜学院から北京経済専門学校へ」として「福山人間文化部紀要」第五巻、二〇〇六年にこの講演記録に対するコメントをも加味して掲載したい。

注2

- (1) "Akira Nakano 1874-1959", *Geographers: Biobibliographical Studies*, Vol. 20, Continuum, London and New York, 2000, pp. 68-76.
- (2) 「多才な地理学者、中日覺―新しい遣通学者―」学際研究、地域研究の

先駆者、「地理科学」53, 4, Oct. 2000.

- (3) 「第二次大戦末期北京における人文・社会系高等教育及び日本語の展開過程―中日覺(院長・所長)を中心に―」(2)、「福山人間文化学部紀要」第四巻、二〇〇四年三月、pp. 99-126.

注3 石田寛「地域研究のための英和用語辞典」、古今書院、一九九二年二月

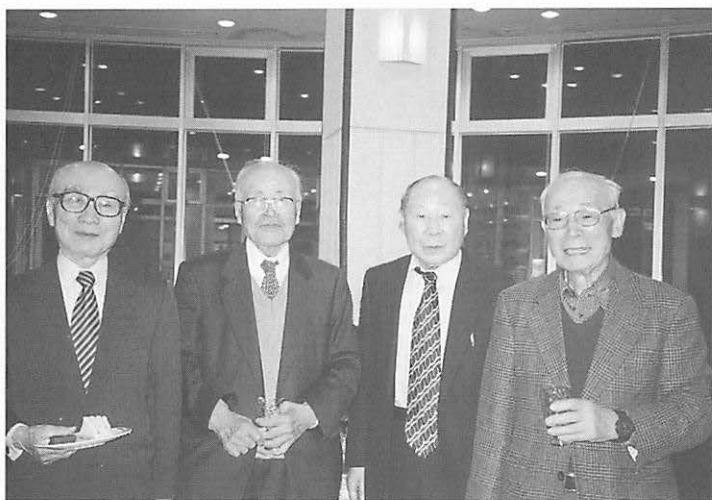
（謝辞とお願ひ）録音テープ起こし・編集したこの文に名前をあげている方々には勿論のこと、そのほか多くの方々にお世話になっている。なかでも小崎昌業、白井義彦、岩崎公弥、Ms. Carol J. Fitch、大久保 勲、呉 英傑、久保卓哉の諸先生さらに何人かの留学生、そしてまた福山大学図書館・岡山県立図書館に深謝する。北京同学会・東亜同文会の方々からさらなる情報・教示がいただけるならば、幸甚に存じます。

北京興亜学院から
北京経済専門学校へ

懇親会にて
2002年11月20日(土)



経専3（興亜8）期生と石田寛氏
左から棚橋健一氏・山住隆生氏・石田寛氏・山崎泰義氏・上尾龍介氏



左から上尾龍介氏・石田寛氏・森下博氏（経専1（興亜6）期生）・
高遠三郎氏（東亜同文書院41期生）